

ラクゴ・ザ・フューチャー

第九十回… **おたくって何？** **前編**

文…田中啓文

秋ですなー。テンタクルズ……じゃない、天高く馬肥ゆる秋。食欲の秋、勉強の秋、読書の秋。読書といえば、今月末に東京創元社から「落下する緑・永見緋太郎の事件簿」というジャズミステリーの連作短編集が出るのでよろしく。表題作は、十年以上まえ、光文社の「本格推理2」というアンソロジーに収録された私のデビュー短編であつて、たいがい、そういうものを本に収録するときは、

「今読み返すとつたない出来映えで情けないかぎりだが、デビュー時の思いがつまった、愛着のある作品なのであえて収録しました」

などと言いつけるのが普通だが、読み返してみても全然「つたない」どころか、めちゃめちゃよくできていて、今の自分の作品なんかよりはるかに出来がいいのだ。そのことが情けなかったりして……。

燈火親しむ候、とかいって、秋の夜長には読書をしたり、日記や手紙をつれづれなるままに書いたりして、静かに内省的に過ごすことが多い。とくに男子高校生が、彼女に手紙を書くのは、秋が多いそうだな。秋レター・ボーイズ……なんちゃって。

秋といえば、すぐに冬が来る。冬といえば雪。雪合戦、雪だるま、雪見酒……そういえば雪見大福というのものもあるな。あれは年中、コンビニに行けば売っている。

「大福だけじゃなくて、ワッフルもあるよ」

は？

「雪ワツフル。あなたは来ない」

というわけで、今回もはじまるラクゴ・ザ・フューチャーだが、今月はおたくについてとりあげようと思う。ガイナックスといえばおたく、おたくといえばガイナックスだが、この連載でおたくを正面きってとりあげたことは一度もない。なぜかという、おたくというものがわからないからだ。

はじめに自分が怪獣好きだと意識したのは、たぶん幼稚園のころだったと思う。観にいった怪獣映画のストーリーを、その日のうちに広告の裏にマンガとして描く、というのが当時の決まりだった。これは「ストーリーを細部まで忘れないため」なのである。また、児童雑誌に載っている怪獣の写真はすべて切り抜き、スクラップしていたが、すぐにそのスクラップは膨大な量になって部屋を圧迫するまでになった。

小学校にあがると、残念なことに、「小学。年生」というような雑誌よりも、「たのしい幼稚園」のほうが怪獣に関する情報や写真が段違いに多く、しかたなく私は小学生であるにもかかわらず、「たのしい幼稚園」を購読していたのである。考えてみれば情けない話だが、怪獣のためにはやむをえないことであった。そのころは、夕方に「ウルトラマン」や「ウルトラQ」の再放送があったが、私はノートを広げ、タイトルから脚本、監督、特技監督、その他もろもろのスタッフ名を毎日書きとった。おかげで小学校低学年にしてキヌタラボラトリーだの上原正三だの佐川和夫だのといった名前を覚えることができた。もちろん今になっても何の役にもたっていない知識であるが、ほかの友達のように、単に再放送を観て、おもしろいなあ、では気がすまなかった。徹底的に研究し、細部までを熟知しないとおさまらなかつたのである。この傾向は、長じてマンガを読みだすようになってから加速し、手

塚治虫や石森章太郎、松本零士、藤子不二雄、横山光輝といったSFマンガ家の作品を読みまくった。それも、自分でリストを作り、ひとつずつ潰していったのである。今のようネットも資料本もないので、買ったコミックスに入っている広告やちよつとした情報をもとにして、自分なりのビブリオグラフィーを作って、「とにかく全部読む」のを目的として毎日がんばった。手塚治虫なら「新宝島」から読まない気がすまんのであるが、これはたしか、ジュンマンガとかいう本に全部再録されていたのを友達の河野くんに借りて読んだような記憶がある。マンガにはまると同時に、「自分で描く」ことにも熱中し、手に入るかぎりのマンガ入門書を読みまくり、道具を近所の文房具屋でそろえ、いっぱしのマンガ家になった気分で手塚マンガや石森マンガを模写したり、オリジナルキャラのストーリーマンガを描いたりしていた。この「すぐに自分でもやりたくなる」という性癖は今でも抜けず、たとえば小説が好きになればただちに原稿用紙を買いに走り、ジャズが好きになればただちにサックスを入手しようと東奔西走する。おとなしく一鑑賞者でいればいいのに、なんか「やってみたい」と思うんです。関心がマンガから小説に移ると、ますます「のめりこみ度」は進み、これはまえにも書いたが、小学校の図書室で筒井康隆編の「SF教室」を全部ノートに書き写して、そこに載っている作品を片っ端から読み、読み終わったものはノートに印をつけていく。個人誌をはじめて作ったのは小学生のときで、たぶんガリ版で2種類出した。中学に入ると、同人誌を主宰するようになり、ますますSFへの傾斜を強めていく。

これって、今の目から見ると、まさに「おたく」ではないかと思うのだが、そのころはまだ、そんな言葉はなかったのである。

おたくという言葉をはじめて聞いたのはいつだったか……ある資料によると、83年に雑誌連載された中森明夫というひとの『「おたく」の研究』が嚆矢だというのが、それだと私はすでに二十歳をこえているわけで、もうちょっと早い段階で耳にしていたような気がするが、記憶ちがいかもしれない。でも、高校生のころだったと思うがなあ……。とにかく、はじめて聴いたのはテレビからであって、マニア的な性格をもっていて、アニメやマンガといった、ちよつとマイナーなものを収集したりのめりこんだりする若者が増えており、彼らは対人関係が苦手なために、相手のことを「おたく」と呼ぶことから、「おたく」と呼ばれている、というようなことをニューズキャスターみたいなひとが説明していた。それを聴いていた私は、ドキツとした。自分のことを言われているように思えたからである。たしかに私はこどものころから、コレクター的な資質があり、ものを集めるのが好きだ。たとえばマンガでも小説でも、歯抜けがあると嫌で、「全巻集めたい」と意味なく思ってしまう。しかし、一番ドキツとした点は、「対人関係が苦手で、相手のことを『おたく』と呼ぶ」というところで、実は私は小学生のころから、他人とかかわるのが大の苦手で、たとえば友達でも、どう呼んでいいかわからず、「おまえ」だとなれなれしすぎるし、「きみ」だとよそよそしいし……というところでひねりだした呼び方が、「あんた」と「おたく」だったのである。だから、このニューズキャスターが言っている「おたく」とは俺のことだ！と思ったと同時に、いや、ちがうな、とも思った。その言葉を聞いたとき、すでに私は長年にわたって続けていたコレクター的なことも同人活動も放棄していたからである。とゆーか、コレクターになるには、よほどの金と時間がなければ無理、ということをしみじみ実感することがあったので、

「あきらめ」の状態になっていたのである。ただ、そのニースは、「おたく」という人たちをあまり良い印象でとらえていない、いや、完全に馬鹿にしているように思えたので、私の心は痛んだ。いくら、「俺はちがうな」と思っても、自分のなかに、おたく的性質があることは明白だったからである。

さて、私は、e-NOVELSで「まみむめモンスター千一夜」という連載を50回にわたって続けたこともあり、世間的には怪獣好きだと思われるようだが、実はそうでもないらしい。というのは、ゴジラに関しては私のなかでは「メカゴジラの逆襲」で終わっており、「ゴジラ対ヘドラ」で終わっていたのかもしれないが、平成ゴジラには何の関心もなく、情性でいろいろ観ることは観たが、どれもアラばかり目につき、まったくのめりこめなかった。仮面ライダーについては、なんとかがんばってBLACKまで、アギトもクウガも龍騎もまったく興味ない。たま〜に観ても、こんなごてごてした格好のやつが仮面ライダーであるはずがない、と頭から思ってしまうのである。ウルトラマンも、私のなかでは「帰ってきたウルトラマン」のベムスターあたりで終わっている。あとは情性で観ていただけだ。とくに「ウルトラマン80」以降はまるで食指が動かない。今のほうが、怪獣の造形など格段に良くなっているとは思うのだが、なぜなんでしょうね。とにかく全然観たいと思わないのだ。ウルトラQも復活したが、一話も観ていない。もちろん、元のウルトラQは死ぬほど好きですよ。それがなぜこんなに冷淡になれるのか、自分でもよくわからない。まわりの同年代の作家たちは、驚くほどそういった番組を観ている。そして、毎週毎週、今日のライダーはとか今度のウルトラマンはとか真剣に語ったりしている。不思議だ。何が不思議って、自分が不思議

議だ。あれほどのめりこんでいた特撮系番組に、なんの関心もなくなってしまったのである。これはどう考えても、まわりの人たちのほうが反応として普通でしょう。こどものころ、好きだったものを大人になっても見続ける。そうあるべきだと思うが、興味がないんだからしかたがない。唯一の例外は金子カメラで、とくに第一作のギャオス篇は、どーせしようもないに決まってる、とたかをくくって、梅田の映画館にひとりで観にいったにもかかわらず、エンドロールが流れたときには滂沱の涙だった。それは感動して、というのともちよつとちがい、一種の悔し涙だったように思う。こんなすごい作品にどーして俺はかわれなかったのか、という、置いてきぼりにされた悔しさである。かわれるわけもないのだが、いい作品、すごい作品に接すると、どうしてもそう思ってしまう。カメラを観た感動は、その頃書いていた「神の子はみな踊る」という作品に露骨に現れていて、主人公の少年が口から火を吐く描写が延々とあるのだが、それはまさにカメラなのである。ちよつと話がそれたが、そんなこんなで、今の私はまるつきり怪獣には関心がなくなってしまうている。SFに関しては、皆さんもご存じのとおり、かなり距離を置いている。私が一番そうなりたくなかった、「SF? 昔はよく読んだけど、最近は全然だねえ……」とかほざくおっさんになりさがっているのだ。ジャズと落語については、そこそこの興味をもって関わっているが、どちらも「仕事」になっってしまったいて、いろいろ利害とか「大人の理屈」みたいな不純物が入りこんでおり、昔のような情熱をもって接することはとうてい不可能である。

そもそも、おたくなどというものは、「私っておたくなんだよねー」とか公の席で口にするような生やさしいものではなく、人生をすべて投げ捨てて、その道に墮す、というよ

うな覚悟をもって取り組むべき、あるいは、そうしたくないのにどうしてもそうなってしまう業のようなものだと思うっており、実際、私の知っているおたくたちは、そのために人生を誤ってしまったているひとばかりである。おたくというのは、たいへんな、とんでもないことであって、ちょっとアニメ好き、とか、フィギュア好き程度ではとうていおたくなどとは名乗れない、ゴールデンな称号であると考えるのである。

そんな立派なおたくにはなれなかった私だが、ここへきて、おたくとは何か、ということをはじめてまじめに考えてみようと思った。世の中、おたくに関する本はいっぱい出ているが、そういったものは一切参照せずに、勝手に勝手にについて考えてみたい……というところで今回は枚数がつきた。次回、後編に期待せよ！

(了)